

太平洋の宝石

—北西ハワイ諸島—



文：マーク=ウェクスラー

写真：ジョージ=H=ポラージュ

イ

ースト島は、ホノルルからおよそ800kmあまり、太平洋上にぼつんと残された、珊瑚に点在する面積4.9a 程度の小島である。サンゴ礁と紺碧の海に囲まれた島ときけば旅行気分もそそられるが、けっして熱帯の楽園ではない。太陽は容赦なく樹木のないむきだしの島を焼き、水蒸気を多くふくんだ貿易風が、溶鉱炉の炎のように砂地をなめていく。天然のわき水はなく、沖にはつねにサメ

太平洋に散らばる北西ハワイ諸島では 絶滅にひんした
動物たちを守るために 科学者たちが
きょうも灼熱の下で闘っている



ぼつんとはなれた太平洋上の宝石
ホエールスケート(上)は、北西ハ
ワイ諸島の大小100をこす小島の
ひとつである。この地域は、アオ
ツラカツオドリ(左端)のような海
鳥や、絶滅しかけているハワイモ
ンクアザラシ(左)のかけがえのな
い繁殖地であり、このアオウミガ
メをだいているジョージ・ボラー
ジュ氏(右ページ)のような科学者た
ちの足しげく通うところでもある。

が泳ぎ回り、夏を過ごすにふさわしいとはとてもいえない。しかし、ボラージュ氏は、この10年間ずっと、ここを避暑地にしてきたのだ。

「自分でも、よく不思議に思ったものです。いったいおまえはここでなにをやっているのかってね」ハワイ大学の生物学者39歳のジョージ=ボラージュ氏はいう。そうはいっても、かれはこの孤島で過ごした年月の1分といえどもおもしろいと思ったことはない。イースト島は、アメリカ最後のアオウミガメの大繁殖地であり、ボラージュ氏はカメの専門家なのである。

毎年、ハワイ一円の約300匹のアオウミガメが繁殖のためにイースト島を訪れ、ボラージュ氏はその記録をとるために頻りに島を訪れる。「ハワイのアオウミガメについての知識の大半は、かれから提供されたものです」アメリカ魚類および野生生物局(FWS)職員ロバート=シャーレンバーガー氏はこう語り、さらにつけ加えた。「われわれが正しい方針を打ち出すには、この種のデータが早急に必要です」

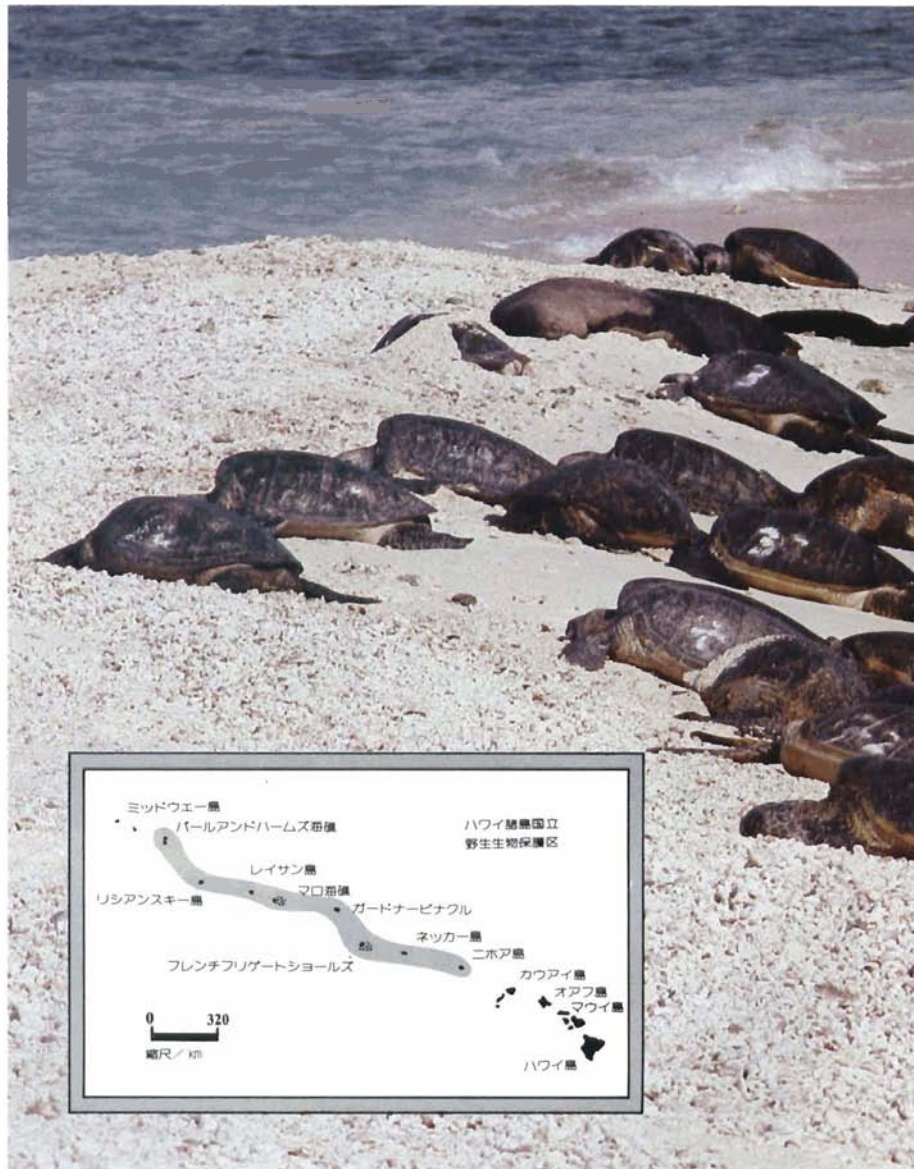
イースト島をふくめたハワイ諸島国立野生生物保護区の運営にたずさわるシャーレンバーガー氏は、その地区のおびただしい野生生物資源の保護の必要を日に日に痛感しているのだ。かれは何人かの科学者たちの協力を得てデータ集めをしている。

太平洋上1800kmにわたり、100をこえる小島、環礁、砂州、そしてそそり立つ岩を点在させ、またの名をリーワード諸島ともいう北西ハワイ諸島は、1909年、セオドア=ローズベルト大統領によって、野鳥保護区が設けられて以来、大半の島が国立野生生物保護区に組み入れられ、より多くのデータを必要としている。

「地球のどこにいても見られない生物がここにはいます」とシェイラ=コナントさんは語る。彼女はハワイ大学で、ニホアという離島に生息する絶滅寸前の鳥を研究している。

絶滅しかけた4種の鳥の棲む北西ハワイ諸島は、世界有数の鳥の繁殖地でもあり、毎年、数百万のアジサシ、ウミツバメ、カツオドリ、アホウドリ、グンカンドリなどのさまざまな鳥が、島の寸土を

(9ページへつづく)



「ここは世界でもめずらしい、ウミガメが人間にじゃまされずにひなたぼっこできる浜辺です」生物学者のボラージュ氏は、この小さなイースト島(上)についてこう語る。フレンチフリゲートショールズとよばれる環礁に散らばる小島のひとつ、わずか4.9aの砂州ながイースト島は、アメリカ最後のアオウミガメの大生息地である。北西ハワイ諸島の大半がそうであるように、ここも国立野生生物保護区(地図の灰色にぬられた地域)にふくまれている。2200kmにわたり点在するハワイ諸島は、世界最長、そしてもっとも孤立した列島である。



ハワイ中のアオウミガメが集まるイースト島の沖合では、毎年春になると繁殖のための儀式がおこなわれる。つがいのカメは、ときに数時間を交尾に費やす(右上)。その後、メスは浜にはいあがり、夜中かけて砂に穴を掘る(中)。そこには、ゴルフボールほどの大きさの白い卵が150個も産み落とされ、2カ月後にはその卵からかえった無数の赤ん坊ガメが砂をかきわけて地上に出てくるのだ(右)。日が沈むとこの赤ん坊たちはわれ先に水辺に走り、太平洋へと姿を消していく。



サンゴ礁での 調査活動も らくじゃない

はるかなる太平洋の環礁で、ウミガメに標識をつけて数週間その行動を調査する、といってもけっしてすてきな話ではない。暑さはたえがたく、仕事はきびしく、孤独に神経がまいりそうになる。北西ハワイ諸島で調査をおこなうこの4人の科学者たちも、まずい食事と原始的な生活環境、吸血虫に悩まされている。それでも、実地調査の成果の前には、苦勞などものの数ではないと4人は口をそろえる。かれらの体験を紹介しよう。



シェイラ=コナント 「オープンななかみたい」

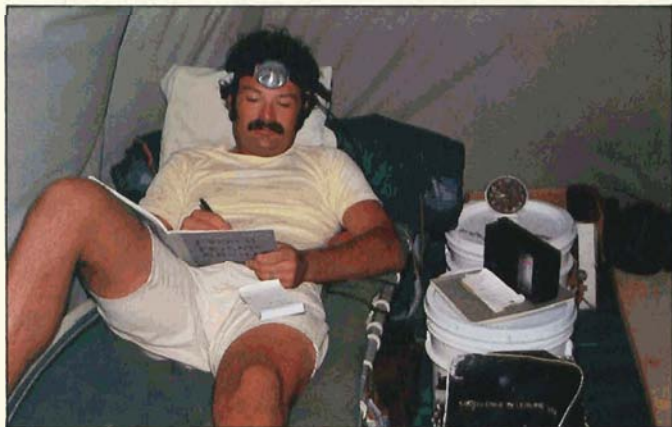
ホノルルからわずか480kmの距離なのに、ニホア島は外界とまったく切りはなされた世界である。上陸がきわめてむずかしい面積約60aのこの無人島は、絶滅しかけているミツスイの1種、ニホアハワイマシコ約1500羽と、300羽に

満たない小形のヨシキリの一
種レイサンヨシキリが生息する
唯一の場所である。

ハワイ大学の生物学者シェイラ=コナントさんはこの数年、樹木のないこの島で夏を過ごし、鳥のカウンティングをおこない、かれらの欲求と行動の解明につとめてきた。「たまには人からはなれるのもいいことですね。ニホア島では、必要最小限のものでいかに生きるか学びました」と彼女はいう。助手として3カ月単位で、この島での生活をくり返す37歳の女性動物学者にとって、最大の問題は暑さだった。「ニホアには木かげというものがありません。テントのなかに座ると、まるでオープンななかにいるようです。不潔さにたえられない人はだめでしょう」周りの海はサメだらけで泳げないうえ、真水は貴重でシャワーはぜいたくなのだ。食事はインスタント食品が「山のようなクラッカー」。

かつて、ニホアはハワイでも大きな島であった。彼女が調査中の2種の鳥は、当時の生き残りだという。今日では、浸食された火山のほんの先端だけが、海の上に顔をのぞかせている。

コナントさんがいちばん頭を悩ますのは、島への行き帰りの問題である。ニホアには上陸可能なところは1カ所しかなく、そこはたえず大波が打ち寄せている。コナントさんは漁船をチャーターし、動力付きのゴムいかだをおろして島にわたり、帰りは日時を指定してむかえにきてもらう。「去年、ボートがむかえにきた日にも、島の周りには6m級の波が打ち寄せ、3日も待ってやっと島を出たのですが、そのときも、荒波で命の縮まる思いでした」



ジョージ=ボラージュ 「人間がサメに勝ってくれた」

「孤独感がおし寄せることはあっても、たいていは忙しくて、ひとりぼっちだなんて忘れていきますね」とジョージ=ボラージュ氏は語る。本稿の写真を撮影した39歳のこのハワイ大学の生物学者は、1970年代前半にアオウミガメの調査のために北西ハワイ諸島に足をふみ入れ、以来繁殖期には必ずここを訪れる。「カメたちの追跡をはじめたなら、失敗はもちろん、1日の休息さえも許されません」産卵のために上陸するメスガメの計測と標識取り付けのために、ときには徹夜になることもあるという。調査地はわずか4.9aのイースト島のみだが、毎春ハワイ全体の半分以上のアオウミガメがここで生殖活動をおこなう。「ここは、人間を気にせずカメが浜で日光浴できる世界でもめずらしい場所です」

ボラージュ氏はカメを追い、ハワイの多くの島々を訪れ、さまざまな困難にであった。「太平洋の真ん中の大岩、ネッカー島にいったときのことで。沖までむかえにきた漁師たちはそれ以上は高波で近寄れず、しかたなく海にとびこみました。サメか人間か、どちらが先にわたしを捕まえる

か競争です。さいわい人間が勝ってくれましたがね」

現地調査をやめるつもりはないが、ボラージュ氏も長期間家をあけるのはむずかしくなったという。

「息子も大きくなり、だんだんむちゃはできなくなります。それでも、やらねばならぬ研究は山のようにありますよ」



ロバート=シャーレンバーガー 「土地を信頼するな」

「政府の仕事についた今、もっと現地で過ごす時間がほしいと思っています」37歳、ロバート=シャーレンバーガー氏は太平洋の12の国立野生生物保護区の監督官をつとめるかたわら、動物の行動の研究に時間をさいている。「不自由をたえしのびながらも、何日も費やして動物を観察する“ぜいたく”はもう許されません。そのかわり、ある日はオアフ島で水鳥を、翌日は北西ハワイ諸島でカメと海鳥を数えるとい

うこともあるでしょう」

リーワードのような僻遠の保護区で働いて、かれはひとつの教訓を学んだ。「この土地を信用せずに、いつも用心してかかること。困ってもだれも助けてはくれないのだから」

NWFハワイ支部、ハワイ自然保護委員会前会長でもあったシャーレンバーガー氏は、すぐれた業績により、連邦政府の役人としては10番め、内務省でははじめてのアーサー=S=フレミング賞受賞の荣誉にかがやいた。



Frans Laming

ジョン=アンドレ 「仙人のような男」

ジョン=アンドレ氏は、鳥の暑さを知りつくしている。(上の写真で、ベス=フリントさんとアホウドリに標識をつけているのが氏) 32歳、FWSの生物学者。ホノルルから800kmもはなれたターン島に住むかれは「まさしく絶海の孤島ですよ」と嘆息する。

野生動物の研究をしていないときのアンドレ氏の仕事は、住居とする旧アメリカ沿岸警備隊の建物の手入れをすることだ。「さびと退屈との絶え間なき闘いですね。それにたえるには、ぼくのような仙人じみた人間でなければだめです。この閉ざされた島は700~800mも歩けばおわりですから」



あらそっている。またここには、絶滅寸前のハワイモンクアザラシが生きながらえている。この島々はかれらに残された最後の土地なのである。ところが、1778年にキャプテンクックが上陸してからのハワイは、野生生物にとっても、およそ楽園とはほど遠いものだった。この200年で、ハワイに棲む23種類もの野鳥が絶滅した。しかも、絶滅のおそれがあると指定された鳥の半数以上が、この島々にだけ棲む鳥たちなのである。北太平洋上に2200kmにわたって点在する、世界でもっとも長く、もっとも孤立したこの列島にとって、これはなんとも不思議な現象である。

オナガミズナギドリが、野生生物保護区の島で、穴を掘り、暑さをしのいでいる。この区域は、北太平洋の海鳥17種の主たる繁殖地で、毎年、数百万羽の鳥が小島の上で利用できそうなわずかな土地のうばいあいを演じる。

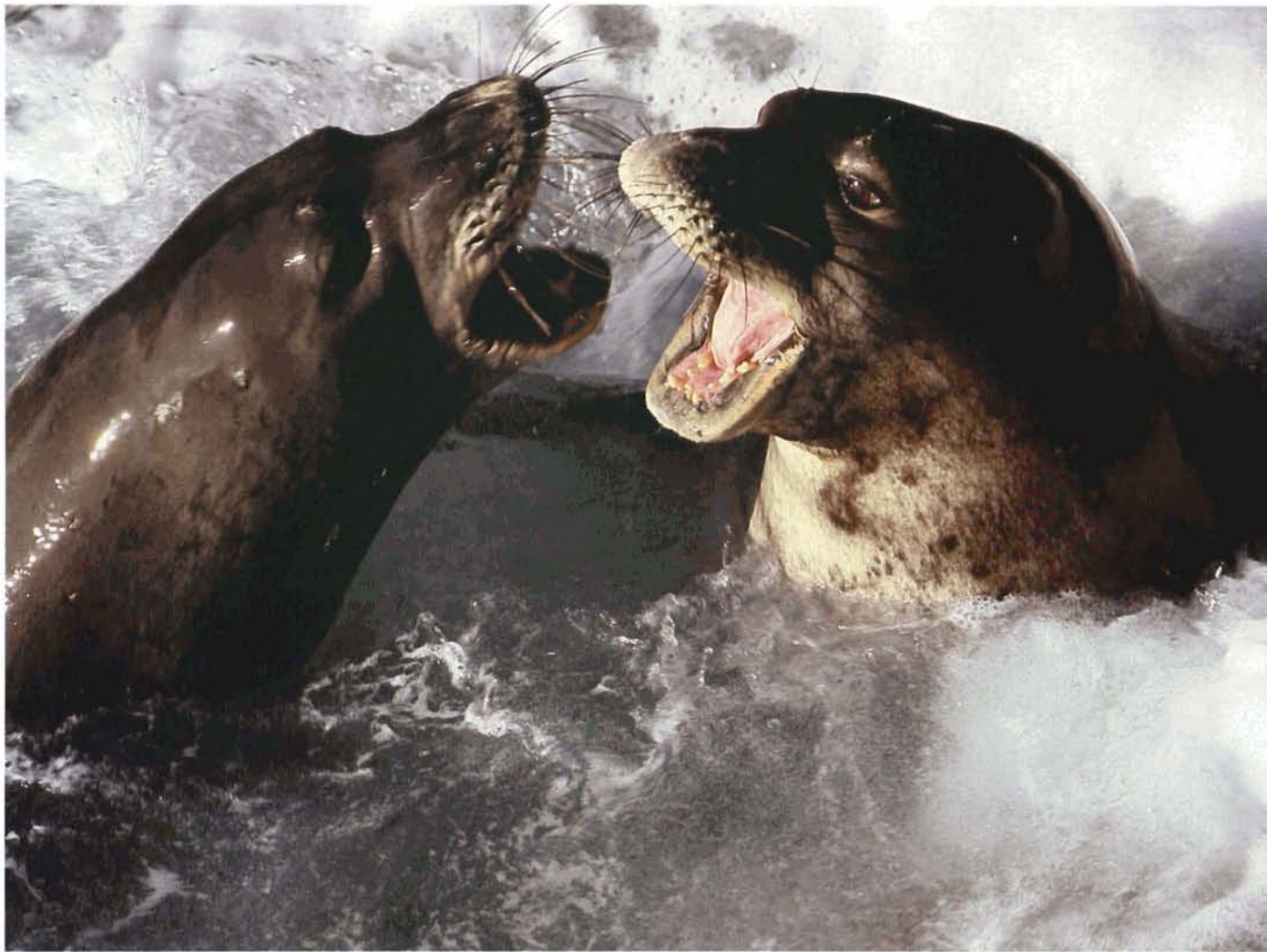
ハワイ諸島のなかでも、年代的にいち
(13ページへつづく)



繁殖期のあいだ、オスのオオグンカンドリは深紅のど袋をふくらませて、まだ見ぬ伴侶をひきつける(左)。機動戦術の得意なかれらは、ほかの海鳥がくわえた魚を、空中でまんまと失敬してしまうこともある。







フレンチフリゲートショールズの波をかきわけながら、たがいにほえあう2頭のオスのモンクアザラシ。モンクとは英語で修道僧の意味で、首にある僧服に似たひだから命名された。このアザラシは、世界中に3種いたが、そのうちのカリブ海の種は絶滅し、地中海の種も絶滅寸前である。ハワイでは、1000頭に満たないながら、保護区の海で生きながらえている。



アオウミガメとモンクアザラシが砂浜にならんで日光浴している光景も、この北西ハワイ諸島では、めずらしいものではない。世界中をみても、ウミガメが水をはなれるのは、産卵のときぐらいだが、ここではオスもメスも日中浜にあがって昼寝をする。このユニークな行動はまた科学的に説明されてはいない。

ばん古いのは、北西のはずれにある島々で、今から2500万年前、火山の爆発で地殻を破り、海面に姿をあらわした。まだ新しい島々は、その北西ハワイ諸島とはちょうど反対側の端に位置し、なかでもいちばん新しいハワイ島は、推定年齢100万年で、今なお成長をつづけている。

火山島とサンゴ環礁をあわせても、北西ハワイ諸島の面積はわずか13km²だが、周辺の海域は海面上にあらわれた陸地と同じくらい重要なものだ。シャーレンバークー氏のことばを借りれば、「陸と海は生態学的に切りはなせない」ものなのだ。そのため現在、保護区と周辺水域をめぐる州と国との意見の対立を生んでいる。

州の水産資源課のヘンリー=サクダ氏はつぎのようにいっている。「島と島のあいだの海は州のもので、保護区とは海面にあらわれている土地のみを管轄するものです」政府では、水面上の土地と、島をとり巻く珊瑚の水域1000km²全部が政府の責任範囲だと主張するが、これは単なるなわばり論争ではなく、結果しだいで、リーワード水域の漁業振興に力を入れる州の方針が左右される重大問題なのである。サクダ氏はさらにつづけた。「漁業を育てたいと思っていることは事実ですが、乱獲はさせません。生物を保護したいと思うのは、われわれとて同じです」

この論争の最大争点は、18世紀後半に座礁した船にちなんで、フレンチフリゲートショールズとよばれる環礁の管理権である。全長約30km、半月形のサンゴ礁が防波堤となってこの浅い海を囲んでいる。外では8mにもおよぶ高波がはげしくぶつかりくだけ散っていても、ひとたびサンゴ礁のなかに入れば、そこは海の生物の楽園、澄明な水をたたえた浅海なのである。ハワイ諸島のほぼ中央に位置するフレンチフリゲートショールズは、かつては大きな島だったが、今では、イースト島をふくめた小さな樹木1本ない大小の砂州がその名残をとどめているにすぎない。

第二次世界大戦のときに、その砂州のひとつ約4.5aのターン島が、アメリカ海軍の手で、23aの飛行場につくりかえられた。後年ここには、沿岸警備隊の施設

が建ち、1979年にFWSがその施設の管理をひきついでいる。現在では科学者らに送られてきた物資の受け渡し場所となっているが、ここを漁船のドックにしようという案も出ているのだ。

「動物におよぼす影響を補ってあまりあるほどの水揚げがあるという保証はありません」と漁業局の生物学者ビル=ギルマーティン氏はいう。39歳、のっそりと温和そうなギルマーティン氏がとくに心配するのは、絶滅寸前にあるモンクアザラ

「このハワイ諸島に 万一のことがあれば ここに棲む多くの 動物は 行き場所を 失うことになるのだ」

シに、人間がおよぼす影響である。政府から派遣された復興班の責任者であるかれの仕事は、このアザラシのかかえる問題をさぐり、その解決策を見つけることである。「モンクアザラシは、人間に平穏をかき乱されることをひどくきらいます。たえず脅かされるようなら、繁殖地から出ていくでしょう。沿岸で魚をとれば必ずかれらの生活をかき乱すし、子どものアザラシは網にかかるかもしれません」

定期的にハワイの大きな島にやってくるアオウミガメとはちがって、モンクアザラシはめったにリーワード諸島から出ない。カリブモンクアザラシが絶滅し、地中海地方のなかも絶滅寸前という今、ここはかれらの最後の砦なのだ。最近、陸にあがっているところを500頭ほど確認されたが、全体数はわかっていない。

モンクアザラシとは、背中に僧服と似たひだのあることからつけられた名である。メスは、1年おきに1子を産み落とす。19世紀には、油めあての乱獲がおこなわれたために、数が回復することはなかったが、軍隊の去ったあとのターン島では、少しずつ数がふえてきている。こ

の島に人間を入れない理由は、それだけで十分だ、とギルマーティン氏はいう。

一方、アオウミガメのほうも今ではかなり待遇が改善された。10年前まで、さかんに捕まえられてホノルルのレストランにおろされていたが、1978年、漁が禁止され、絶滅のおそれのある種のなかま入りをした。「やっとこのごろ理解が深まってきました」とは、過去10年、1000頭以上のアオウミガメに標識をつけて行動を調べてきたボラージュ氏のことばである。

標識のついたカメが列島の外では1頭も発見されず、複数の国のあいだを移動することはないとみられることから、ハワイのアオウミガメの保護は可能であるとボラージュ氏は結論した。それでも、アオウミガメの将来はけっして安泰とはいえない。成長がじつにのろいのだ。

以前、かれらは4年から10年で成熟年齢に達すると考えられていたが、ボラージュ氏の標識調査では、10年から50年という結果が出た。これは信じられない結果だが、フロリダとオーストラリアでおこなわれた同種の調査でも同じような結果が得られたことが明らかになった。それから考えると、ひとたび数が減ろうものなら、回復は至難のわざとなりうのだとボラージュ氏は力説する。「カメだけではなく、カメと人間の関係も考えなければなりません。2つを切りはなすことはできないのです」

数年前、イースト島の、これまで数百年間アオウミガメのやってきていた浜辺の近くに、アメリカのある沿岸警備隊員がこんな立て札を立てた、「ここは聖地です。静かに歩いてください」200年のあいだに、地球上で絶滅した動物の数多くがここから消えていったという土地で、このことばは格別の重みをもっている。「その立て札を見るたびに、わたしたちがどれだけ重大な責任をかかえているかということ痛感するのです」とボラージュ氏はこう語った。 ■

原題：TREASURED ISLANDS

本誌アメリカ側編集長、マーク=ウェクスラー氏は、昨年の夏、北西ハワイ諸島のフレンチフリゲートショールズを訪れている。

ワイルドライフ

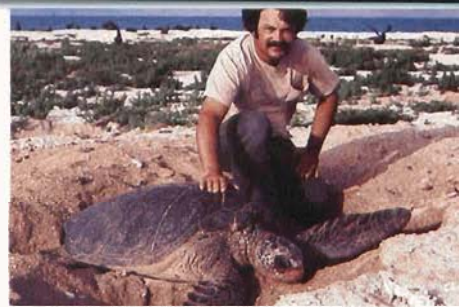
International National
WILDLIFE 3
日本語版 1983年

通巻第57号
ISSN 0386-6068

もくじ

- 太平洋の宝石——北西ハワイ諸島 マーク=ウェクスラー 4
絶滅にひんした動物たちの棲むこの灼熱の島々では、かれらを守るために
きょうも科学者たちが闘っている。
- 空を飛ぶクモ 錦 三郎 14
長年にわたって“雪迎え”という不思議な現象を追いつづけた作者が見たもの
は…。必死で空を飛ぼうとするクモたちの姿を如実に描く。
- 読者のひろば 読者の方々から寄せられた意見をのせるフリースペース。 17
- 宇宙時代のクマ警報はランドサット3号から… アール=カストキー 18
グレーシャー国立公園では、ハイログマと人間の衝突をさけるために、人
工衛星からのデータにもとづいてハイログマ出没予報を出している。はた
してこの方法は、年々減りゆくハイログマの保護につながるだろうか。
- ニンジン論争の根源 マリアン=ニューサム=プライトン 20
万能薬として人気の高いアメリカニンジンも、つみ重なる乱獲がただつて今
や絶滅の危機にある。
- より早く、より多くノ——マルハナバチの豊集め ハート=ハインリック 23
せわしなく花から花へと飛び回るマルハナバチ。かれらの豊集めの機軸は…。
- アナグマの生活誌 バージニア=ワイン 27
モンタナの草地の真ん中で、アメリカアナグマの親子が巣穴から顔を出した。
地下生活のためにほとんど知られていないかれらの生態を追った記録。
- ワイルドライフダイジェスト IN JAPAN 全国の動物ニュース満載。 32
- ワイルドライフダイジェスト IN U.S.A. アメリカの最新ニュース。 33
- トピカルサイエンス——分子進化：進化論の新たな展開 片山 研三 34
ダーウィンの進化論とメンデルの遺伝の法則によって幕が開いた近代生物学
は、今や分子レベルで生物の進化を論じる時代に入った。
- 今、フィールドでは… 加藤 由子 36
野生動物を正しく理解しようと、今、多くの野生動物研究者たちがフィール
ドに進出している。かれらの調査方法や苦心談をレポートする。
- 天才の筆さばき ロバート=マックラッケン=ベック 41
この1世紀のあいだ、アメリカの鳥類画家たちを魅了しつつづけているルーイ=ア
ーサー=フェルテスの描いた生気にみちた鳥たちを紹介。
- 冬 その光と影 写真：R=ハミルトン=スミス 48
暗く、きびしい冬なかから、光あふれる瞬間をとらえたうつくしい冬の映像。
- 表紙 冷たく澄んだ1月の夜、ウィスコンシン州北部で、月を背景にとまるシロ
フクロウ。ハミルトン=スミス氏が撮影。冬をとらえた氏の写真は48ページから掲
載。ニコン、500%、コダクローム)
- 裏表紙 2月のとある午後、カナダ、オンタリオ州のサンダーベイの近くで、ウ
ェイン=ランキナン氏は、ときわ木のそばで獲物をさがすイイズナイタチを撮影。
(ニコン、200%、コダクローム)

本文中の『空を飛ぶクモ』『読者のひろば』『ワイルドライフダイジェスト=イン=ジャ
パン』『トピカルサイエンス』『今、フィールドでは』は、財団法人日本科学協会が独
自に企画・編集したものである。なお、本誌今月号の原文、および写真内容の一部
については、その正確を期するため、ミルウォーキーの公立博物館職員の校閲をへ
ている。また日本語版については、財団法人日本科学協会『ワイルドライフ』委員の
監修および、中根猛彦氏、松井孝爾氏の校閲をへている。



読者のみなさんへ

本誌の原出版社であるNational Wildlife Federation(NWF)は
アメリカ合衆国の首都ワシントンD.C.に本社があります。これ
まで編集はウィスコンシン州ミルウォーキーで、また膨大な数の
会員へのサービスは、ヴァージニア州ヴィエンナで行ってき
ましたが、昨年9月からJohn Strohm編集局長以下編集スタッ
フは、ミルウォーキーをひきあげて、ワシントンの本社で編集
業務を行っております。

ところで、この機構替えと時を同じくして、営業担当の副会
長を勤めていられたJ.A. Brownridge氏が退職されました。
ブラウンリッジ氏は、本誌の生みの親ともいべき人で、昭和
52(1977)年の春、来日のおり本会をたずねられ、そのときの話
し合いが契機となってNWF発行の『WILDLIFE』の日本語版を
本会が出版することになったのでした。それから今日まで日
本語版のためには、いつも暖かい心くばりと適切なアドバイ
スをいただいております。

先日、本会あてにいただいたお手紙に、“私は33年あまりを
NWFですごしましたが、そこでの仕事は私にとって大きな喜
びであり、満足すべきものでありました。なかでも、もっと
もうれしかったことのひとつは、貴会との出会いでした。”とあり
ました。ブラウンリッジ氏に心からのお礼を申しあげるとと
もに、わたくしどもからも“あなたとの出会いは決して忘れ
ることはないでしょう。”と申しあげます。

財団法人日本科学協会理事長

篠達喜人

監修	『ワイルドライフ』委員会
委員長	山階 芳麿 (山階鳥類研究所理事長)
委員	今泉 吉典 (日本哺乳動物学会会長)
(氏名音順)	古賀 忠道 (東京動物園協会理事長)
	近藤 典生 (東京農業大学育種学研究所長)
	末廣 恭雄 (京急油壺マリンスパーク水族館館長)
	沼田 真 (千葉大学理学部教授)
	波部 忠重 (東海大学海洋学部教授)
日本語版	ワイルドライフ 1983年3月号 (通巻57号)
発行日	1983年3月1日
発行所	財団法人日本科学協会 東京都港区虎ノ門1-15-16 〒105 電話/03-502-1931 販売部・商品管理部 電話/03-580-8157
発行人	茅 誠司
編集人	篠達喜人
編集・制作	株式会社 ジェプロ サイエントフィック 電話/03-267-2654
印刷・製本	凸版印刷株式会社

本誌は、ナショナル ワイルドライフ フェデレーションと財団法人日本科学協会との協
定に基づき提供された資料を元にして、財団法人日本科学協会が編集した出版物である。
This magazine is the publication of the Japan Science Society, not the National Wildlife
Federation; it contains copyrighted material made available under arrangement between the
Japan Science Society and the National Wildlife Federation.
©財団法人日本科学協会/National Wildlife Federation 本誌掲載記事の無断転載を禁ずる。

本誌は、モーターボート競走公益資金による(財)日本船舶振興会(笹川
良一会長)の補助金を受けて制作したものである。なお、一般販売およ
び賛助会員配布用は、本会が前記物件を増刷したものである。

すばらしい野生の世界

WILDLIFE

ワイルドライフ



日本語版
1983年

3

太平洋の宝石:北西ハワイ諸島●今、フィールドでは…●空を飛ぶクモ